

いないので、スコップによる人力で堆肥化技術を教えています。暑い国なので汗だくで大変です。行政に対しては住民・企業と連携をとることの重要性や廃棄物処理計画作成について指導しています。そしてデポック市はインドネシア政府から環境に関する表彰を受賞するまでになり、それを評価したバリ州から本町への指導要請があり現在に至っています。



▲生ごみの異物除去作業

インドネシアの人々の反応はどうですか？

東 最初はゼロからのスタートなので本町職員がインドネシアの住民に説明会を行うのですが、「なぜそんな面倒なことをさせるのか。」「家事の負担が増える。」など、本町が分別

を開始するときと同じような意見が出ました。本町と同じように埋め立て処分場の問題を訴えて理解を求めましたが、私たちが分別の目的や初心を忘れないためにも貴重な経験でした。また住民・企業・行政のリーダー格のメンバーを本町に招いて指導を行いました。大崎システムをよく理解し、現在では普及指導員として彼ら自身がインドネシアでの指導を行っています。

中村 インドネシアからの研修生が大崎町を訪れた時に交流会の機会がありました。自分たちの町の取り組みが外国に影響を与えていると嬉しい気持ちになりました。



▲研修生との交流会

インドネシアへの企業進出が決まったそうですね。

東 デポック市への3年間のJICA事業期間で、指導を行ったモデル地区では大崎システムがかなり浸透しました。ただデポック市全体に大崎システムを広げるにはまだノウハウが不足していて、JICA事業終了後も継続した支援要請があり、実際の収集運搬・中間処理のノウハウを持つている(尚)そおりサイクルセンターが進出することになりました。平成29年度中にはデポック市で操業を開始する予定です。本町のリサイクルセンターは大崎町・志布志市・曾於市合わせて約10万人規模の資源物を処理する施設ですが、デポック市でもほぼ同規模の施設が操業予定です。デポック市の人口は約200万人なので同じような施設が20個は必要になりますよね。今後の地元企業の海外での事業展開に期待を持っています。埋め立て処分場の延命化のために始めた分別が、海外に影響を与えないためには予想も

今後の目標は何ですか？



▲デポック市長と固い握手

ば資源』を合言葉に頑張りたいと思います。

中村 合言葉は『混ぜればごみ、分ければ資源』です。ごみを出す住民の責任として、埋め立て処分場の延命化という目的を忘れず、ごみステーションでの立ち会い活動や住民の利便性向上に取り組んでいきたいと思っています。

東 資源リサイクル率が80%を超え、埋め立てごみは残り20%弱となっています。その埋め立てごみのうち、約半分程度が使用済み紙オムツです。現在志布志市と使用済み紙オムツの再資源化実証試験に取り組んでいます。高齢化の進展に伴って紙オムツの処理は全国の自治体にとっても共通の課題になると考えられます。再資源化技術が確立し、新たな費用負担が発生しないなど、諸問題が解決できれば、埋め立て処分場への持ち込み量はさらに減少し、埋め立てごみゼロを目指すことも不可能ではなくなるので、後世に負担を残さぬよう資源循環型社会のまちづくり

に向け『混ぜればごみ、分け

お二人ともありがとうございます。当手を振り返りながらの貴重なお話はとても感慨深く、あらためてリサイクル率80%というのはすごいことだと分かりました。ごみの分別という毎日の取り組みは、他の自治体にはない『当たり前で特別なこと』であり、最大の自慢だと思います。

また、未来の子どもたちに負担をかけよう『取り組みを続ける』こと。そして、なぜ取り組みを続けなくてはならないかを『伝える』ことが大事であると感じました。これからも、みんなが主役の『ふるさと大崎町』をみんな